

『一步』下巻の仮名遣い説について

久保田 篤

であるヤ行（元の行。以下同）下二段動詞の語尾エは「え」で書くという規則である。

下巻の本文は、下二段動詞の語尾エの、「え」と「へ」の書き分けの説明から始まる。

一世間流布の仮名遣中のえの仮名の所に

したかえて 随

是あやまり也端のへの仮名也したかひしたかふしたかへとかよふ故也

という書き出しに続いて「▲中のえの仮名を書事」の見出しがあり、漢字「消」「越」「見」「絶」の下にそれぞれ「きえ・きゆる」「こえ・こゆる」「みえ・みゆる」「たえ・たゆる」を並べて「かやうにゆえと通ふ類也是やゐゆえよの五音の通ひ也」と述べ、「え」で書くことを示している。ところで以前、仮名草子整版本の仮名遣いを調査したとき、当時の仮名遣いの特徴の一つとして、動詞の活用語尾エの殆どが「へ」で書かれる（ハ行四段・ハ行下二段・ワ行下二段等の語尾エ）なか、ヤ行下二段の語尾エだけが「え」で書かれるという書き分けが比較的多くの本で行われているのが特に印象的で

著者未詳の延宝四年刊『一步』は、前半部を「手尔葉遣」、後半部を「假名遣」とし、「てには」と仮名遣いに関して述べている。

「てには」の論については、この書が初めて言及するとされる「自他」が見られるなど注目すべき点があるため、これまでにも多くの考察が行われているが、下巻の仮名遣い説については、解説等でも簡単な紹介にとどまる場合が多い。¹⁾

下巻「一步 假名遣」には、まず序に当たる文章があり、「今是に記すは通ひ仮名のみ也但かよはぬ仮名をも少々書加ふるものなり」と記す。このように、この書で扱われるのは「通ひ仮名」（主として活用語尾）の仮名遣いである。右の部分に続いて、その理由を「かよひかなにあらざるはかなちかひ待るとも其仮名一字のあやまりにてあまたにわたらずかよひかなのちかひは一字ありても其ことく通ふ詞はそれになぞらへてかななを書ゆへあやまりおほくなるものなりざるによりて其品をあらまし書付侍」と述べる。その「通ふ詞」の仮名遣いの中で最初に示されるのが、「ゆえと通ふ類」

あることを指摘した。⁽²⁾この「え」「へ」の書き分けは、当時心得ておくべき事項であつたことが窺われるのである。

仮名遣書には、語を並べる形式で正しいとする仮名遣いを示す仮名遣い辞典と、項目ごとに法則を述べながら適宜語例を掲げる形式の仮名遣い規則書があるが、『一步』下巻は仮名遣い規則書である。同じ仮名遣い規則書の、例えば『後普光園院御抄』の項目の最初は「端のい」であり「中のゐ」「奥のひ」「端のほ」「中のを」「奥のお」と続く、このような構成について、「いろは歌」の出現順に「端のい」「仮名い」「ほ」「へ」を探り同韻の仮名三字を組み合わせた等、端正な構成と言える点が指摘されている。⁽⁴⁾一条兼良の著と伝える『仮名遣近道』では「端のへ」「端のを」「奥のお」の順となつている。これらと異なり、『一步』下巻が「中のえ」で始まる点に、著者が重要と考える項目の序列を見ることは可能であろう。三条西実隆著と伝える『仮名遣 つゝらおり』の「仮名遣相傳之事」でも、最初が「端のへ」で次が「中のえ」の順で、『一步』とは逆であるがこの二項目がはじめにある。ハ行動詞とヤ行動詞の書き分けを、当時強く意識していたということが窺われるのであるが、基本的には「へ」が使われるから、特殊な「え」を使う場合をまず注意するという『一步』は、より学びやすい仮名遣書であつたと言える。

このような、当時の考え方の反映が大きく、利用価値の高かつたやや詳しく検討することにした。以下、『一步』の記述が何丁に

あるか等の所在の注記は省略する。また記述の途中を「…」として適宜省くことがある。

二

前節に掲げたように、下巻本文の書き出しは「世間流布の仮名遣中のえの仮名の所に」として「したかえて 随」を挙げ、「是あやまり也端のへの仮名也」と注意する。ここでいう「世間流布の仮名遣」というのは、下巻序文に「右流布の本を定家の仮名遣と世間にいへ共定家卿の所作にはあらず大形に書集て置給ひし仮名遣に又後人書添てあまれし故あやまり有之といへり」とあることから『仮名文字遣』の類の仮名遣書であろうと推測できる。実際、この「したかえて 随」や、『一步』の他の箇所でも「仮名遣」にあるとして挙げて「さがなひ 無悪」「なひて 泣」「とひて 説」「うつろふ 移」と、のほろ 調」「おいて 負」「すいて 吸」「むまる 生 うまる 共」「むは 祖母 うは 共」「むまき 美 うまき 共」「ある 居」「くらゐ 位」「ゐのし、 猪」「かたわもの 片輪者 頑者」、また「無為と書てあちきなう無人望と書てすけなう」などの仮名遣いを、慶長版本『仮名文字遣』と比較すると、「むまる」には「産」の漢字も加わり、「むまきもの 美物 うまき 共」になつているなど小異はあるが、合致する（二つだけ、『一步』で「一同 仮名遣ふの字の所に」として挙げる二番目の「へつろふ 詔」は、『仮名文字遣』慶長版本では「へつらふ」と異なる）。更に、「したかえて」「さかなひ」「なひて」「おいて」などは、文明十一年本、

天正六年本などの写本になく、慶長版本にはあること、また文禄四年本には「さかなひ」「なひて」「おいて」「したかえん随」となっているのに対し、慶長版本では「したかえて」であることなどから、『一步』に引かれる「仮名遣」は、『仮名文字遣』版本（流布の本ということからも）であると見られる。（なお、厳密には更に多くの諸本と対照する必要があるが、今回は概ねどのようなものであるかが分かればよいので、これ以上の追究は措く。）

最初に、定家仮名遣いの「したがえて」を誤りであるととし、「したかひしたかふしかたへとかよふ故」に「へ」であると示している。「随えて」という下二段動詞の説明に「したがひ」も入れる点は現代の意識と異なるが、八行に「かよふ」ということから、「ゆえと通ふ」故に「え」と書くものと区別するという規則は、分かりやすいものである。この『一步』よりも前に、例えば『仮名遣近道』でも、「端への字の事」に「五音相通にてふひへく」と説字は皆への字なり」と記し、また「中のえの事」の項目では「やいゆええ相通故にゆえと通かなは皆中のえなり」と記した後に「見えみゆる見」「きこえきこゆる 聞」「おほえおほゆる 覚」などが挙げられているように、既に八行または八行に「通ふ」ということを根拠に書き分けを主張することが行われていた。このような活用する行による書き分けの指示に関して特に『一步』に新しい点が見られるわけではないが、前節に示したように「へ」と「え」が離れている『仮名遣近道』に対し、「え」とする定家仮名遣いは誤りであるとすると指摘から始まって、「▲中のえの仮名を書事」の見出しのもと、

では「え」を書く場合はこれであるとし、続いて「▲端のへを書事」で「へ」の場合を説明するという『一步』は、理解しやうい構成になっている。

「消」など四つの漢字の下に「きえ・きゆる」など「くえ・くゆる」を並べた後、「かやうにゆえと通ふ類也是やるゆえよの五音の通ひ也」とする。続いて「とらふ同仮名遣ふの所にありとらふといふ故とらへのときはよこへ也」と述べ、八行下二段動詞を挙げて、こちらは「へ」であることを主張する。既に述べたように、動詞活用語尾エには、江戸時代初期の板本に共通してこの書き分けが見られ、この規範の浸透していた様子を窺うことができるのであるが、ここでも一応念のため、当時の作品の版本の実態を少しだけ示しておくことにする。

寛文年間刊『東海道名所記』⁽⁶⁾は、後半部（巻四〜六）が自筆版下である点などから注目すべき資料であるためこれまでに何度か報告をしたことがあるが、対象が後半部の本文部分のみであったり、全巻を対象としたが用例数を示すにとどめたりしたので、改めて簡単に示しておく。動詞語尾エは殆どが「へ」で書かれ三〇〇例以上（用例数は以前の報告に詳しく示したのでここでは概数のみとする。振り仮名は五例）。八行四段は一六〇例以上がすべて「へ」。八行下二段は一四〇例程度で、「つたへ待る」（一三才）、「うつたへ」（一四才）、「か、へて」（二二才）、「た、へて」（二四才・二四ウ）、「湛へ」（二八ウ）、「したがへ」（二五ウ）、「うろたへて」（二七才）、「とらへられて」（三三ウ）、「袖をひかへて」（三六才）、「そへて」

(三9ウ)、「と、のへ」(三27オ)、「はへしげりたる」(四4ウ)、「うちしたがへられし」(五5ウ)、「あたへ給はんや」(六4オ)など皆「へ」であるが、後半部には一例だけ、巻二で「へ」の「湛ふ」が、「え」になっている。「酒をたゝえて」(四10ウ)があった。一方、ヤ行下二段動詞の語尾エは、七〇例以上(振り仮名は六例)が「え」となっていて、書き分けがはっきりしている。「聞えし」(二3オ)、「はこね八里をこえて」(二7ウ)、「肥ふとりて」・「こえふとりて」(二14オ)、「雪はきえずして」(二17オ)・「消ぬらん」(二27ウ)、「長山そびえて」(二24ウ)、「覚えたるは」(二27オ)、「みえつかくれつ」(三10オ)、「きこえければ」(三30オ)、「火もえつきて」(四13オ)、「影みえて」(五27オ)、「ほえず」(吠)(六9ウ)など。但し、前半部に振り仮名一例「夢路絶たる」(三5オ)、後半部自筆版下部分に「さかへ」(榮)二例(六3ウ・六31ウ)(同じ後半部に「さかえ」二例(四21オ・五2オ)もある)と「病いへにけり」(癒)(六31ウ)という「へ」がある。「さかへ」については、『二歩』にも「さかふる・さかへる」とあり、『二歩』の記述と当時の表記が合っている。

もう一点、寛文年刊『身の鏡』⁽⁸⁾も簡単に見てみる。ハ行四段動詞の語尾エは全て「へ」で、例えば「言ふ」の已然形一三例・命令形一例が「いへ」や、「おもへば」二例など。ハ行下二段の語尾エも「へ」で、例えば、「こらへて」(堪)三例、「ちかへ」(遣)一ず・一て・し等)五例など。一方、ヤ行下二段については、まず「見え」の二二例全てが「え」であるなど、やはり書き分けが行われて

いる。「見えたり」(上2ウ・中15オ・下2ウ等)、「みえたり」(上10ウ・中7ウ)、「見え給ふ」(上12ウ)など。但し、この資料ではこの「見え」以外の用例数の少ないヤ行下二段動詞は、「へ」であったり、「へ」と「え」が併用されたり、「え」と「え」が併用されたりと、『東海道名所記』に比べると統一性という点では劣るところがある。⁽⁹⁾「消ゆ」「聞こゆ」各一例は、「きへ行とも」(中16ウ)、「きこへたり」(中3オ)となっていて「へ」である。「凍ゆ」は、「こゝゑて」(中14ウ)、「こゝへて」(下11オ)で、「え」「へ」一列ずつとなっている。また「覚ゆ」は、「いまだ覚ぬさきに」(上3ウ)、「覚えて」(中17ウ)で、振り仮名の「え」と本文の「え」一列ずつとなっている。このように用例の少ない動詞は「え」に統一されているわけではないが、このような文献でも「見え」が全て「え」で、殆どが「へ」の語尾エの中で特殊な表記になっている点に、当時の傾向を見ることができるところで、勉誠社文庫『二歩』の解説に、「ハ行下二段・ワ行下二段活用の動詞、…などは、中・近世的には…ヤ行下二段動詞として使用されることが多かった。こうしたヤ行動詞の面を加味して、ハ行下二段動詞の活用語尾の仮名遣に言及しようとするのであるから、『二歩』の悩みは想像以上に大きかったといえる」とある。⁽¹⁰⁾これに関して『二歩』では、先の「とらへ」は「よこへ也」とした後

とらゆるといふとかきたる物もありかやうにゆるといはる、詞もふにかよふはよこへを書いてよしと心得へし

と述べる。更に「消」と「越」の下に「きえ・きゆる」と「こえ・こゆる」を並べ、

…と斗かよひてきふるこふるといはれざるはち、みえの仮名也と記す。このように、「こゆる」というとしても、

「ふ」に「かよふ」ものは「へ」、

「ふる」といわないものは「え」

とする規則は分かりやすく利用価値の高いものであると言える。同じ点を、続いて「植う」について述べた後に、「猶端のへの仮名の所にまかふ詞あり」として、

かんかへ をしへ なからへ すへ をさへ そなへ

是等也かんかゆるをしゆるなからゆるすゆるをさゆるそなゆる如此ゆるといはるれ共かんかふるをしふるなからふるをさふるそなふるとふにかよふ故よこへ也

と述べ、またこの項目の最後にも、

フイフウエ
はひふへの四字の内にかよふ詞はゆるといはる、ともよこへを書てよし

と記し、「ふ」(「は・ひ・ふ・へ」)に「かよふ」ものは「へ」という規則を繰り返し示す。

右の直前にワ行下二段動詞「植う」について、

常にはうゆるといふ然共うへの時ち、みえにあらす是仮名遣にうへうふると両所にあり

と述べる。この記述から、定家仮名遣いの誤りの指摘から始まる書ではあるが、基本的には定家仮名遣いを拠り所に行っている点、先

ほどの「とらふ」に「同仮名遣ふの所にあり」とあったことともに、確認できる。ワ行下二段動詞に関しては、右の「かんかへをしへ」…の記述の後に、「据う」について、

すへはすえすゆるとかよふ故よこへはわるしち、みえよしといふ説あり尤すへすゆると斗いはれてすふるといはれす然共すはるとはにかよふ故是もよこへ也萬の書物にち、みえを書たるもあるらめといたまた見ざるやうにおほえ侍る

と記す。異なる説を一応挙げて「…らめど」「…やうにおほえ」などやや自信のない表現も見られる。また「は」にも「かよふ」という、現代とは異なる意識も見られる。結論は「よこへ也」ということなので、当時の状態に合う主張ではある。このワ行下二段動詞語尾エの表記について、作品の例を少し示すと、『東海道名所記』に、「植^うて」(二13ウ)、「うへ木」(二30オ)、「うへさせ」・「うへたり」(三16ウ)、「前にすへて」(四9ウ)、「松二本うへたり」(五6ウ)、『百物語』に、「植^うて」(上5ウ)、「うへ置」(下12オ)、「飢^うたまはず」(下26オ)、「すへかね」(上26オ)、『私可多咄』に、「うへてみよ花」(二10ウ)などがあり、すべて「へ」である。『曾根崎心中』も殆ど「へ」ということである。⁽¹²⁾

なお、この項目の最後には、「字なりをもつて付たる名」である「よこへ」「ち、みえ」や、「いろはをもつて名つけたる也」とする「中のえ」「奥のえ」などの説明があり、基本的な用語についても説明している点には『一步』の書名にふさわしい性格が窺われる。

「▲中のえの仮名を書事」に続く「▲端のへを書事」の項目は、「中のえ」のところで既に種々の説明をしまつてゐるため、簡単なまとめで終わつてゐる。

▲端のへを書事

はひふへの四字にかよふ詞の類也

又此四字の内

はふへの三字

はへの二字

ふへの二字にかよふ詞等也

と記した後、「給」に「たまはる・たまひ・たまふ・たまへる」、「替」に「かはる・かふる・かへる」、「障」に「さはる・さへる」、「榮」に「さかふる・さかへる」を、それぞれ漢字の下に並べ、右に挙げた四つの項の例を一つずつ示している。続けて「あまた書付に不及余は是等にならへてかななを書へし前の段にも断侍」とする。「へ」で書くものについてはむしろここで説明するべきであるが、既に先の「▲中のえの仮名を書事」のところで、ハ行下二段についても、ワ行下二段についても述べてしまつてゐるので、このようなまとめだけの項目になつてゐる。他の規則に関しても、このような繰り返しが目立つ。

続いて、「いにしへ しろたへ かへる ゆへ さへ」という、「かよふかななけれ共」とする語の仮名遣いについて述べられる

が、序文に「少々書加ふる」としてゐる通り、「端のへの仮名と心得へし」とした後、「但生れ付の中のエ奥のゑの仮名を書字は各別の事也」とあつて、詳しい説明はなされない。この後に、再び定家仮名遣いの誤りの指摘がなされる。

一同仮名遣奥のひの所に

さかなひ 無悪 なひて 泣 とひて 説

いづれもあやまり也：此類皆端のいの仮名也

このように、形容詞語尾イとカ行四段動詞連用形イ音便について、いわゆる歴史的仮名遣いに合う仮名遣いが主張されている。

形容詞語尾イに関しては、右の記述に続いて「無の字の留りはきくいしうの五字にかよふ也」という規則が記されている。この語尾イについて、『東海道名所記』を見てみると、前半部では、「あぶない」(一〇オ)、「わけもない」(一〇オ)、「ない」(一五ウ)、「情ない」(三十五ウ)、「つれなひ」(三十五ウ)、「ない」(三十八オ)となつてゐる。後半の自筆版下部分については既に報告したので簡単に示すと、「よい」一例・「ない」三例すべてが「い」で書かれてゐる。『私可多咄』でも、「ない」二〇例以上、「よい」九例など。このように、殆ど「い」で、『二歩』の主張に合つてゐると言えるが、『東海道名所記』の自筆版下でない部分に「ひ」が一例ある点は、『二歩』が、

又近年世間に書あやまれる分

長ひ みしかひ 高ひ 近ひ 寒ひ つらひ かなしひ さ
ひしひ むまひ からひ

此類あまた書付に及はずいづれもきくいしうの五字にかよふ詞也

と述べるように、当時誤ることも多かつたという実態を窺わせるものではある。

カ行四段動詞イ音便に關しては、「泣説是等は留りきくい三字にかよふなきなくないてときとくといてと云也」と述べ、「き・く・い」に「かよふ」というのが、「い」で書く根柢となつてゐる。「二歩」の挙げる例はカ行四段であるが、ガ行四段も合わせて、作品の例を見ると、『東海道名所記』では「ないた」(一八ウ)、『身の鏡』では、「主人きいて」(上九オ)、「老人きいて」(下11オ)、「朝聞道」(中2オ)、「聞て」(下11ウ)、「本をば置て」(下6オ)、「もとを置て」(下6オ)と、すべて「い」になつてゐる。(ただし、「く」に於いて」の場合は「また戦場におひても」(中6オ)のように「おひて」三例、「戦場におひても」(中6ウ)と「おいて」一例。他に、『百物語』では、「きいて」(上17オ)、「くいて」(下18ウ)、『私可多咄』では、「大はたぬいてあた」(三7ウ)、「友たちきいて」(三7ウ)、「啼」(四1オ)、「のいた」(五8オ)その他もみな「い」で、「一歩」の主張に合う仮名遣いになつてゐる。ただし『一歩』が、

風ふひて うつふひて あふのひて つひて た、ひて

此類もあまた書付に不及いづれもきくい三字にかよふ詞也是

は泣の字説の字とおなじかよひ也

これら形容詞語尾イとカ(ガ)行四段動詞イ音便の表記は、動詞語尾エと同じく、やはり『一歩』の主張と当時の実態が合致してゐると言える。またここで述べる「きくいしう」はこの後も繰り返され、印象付けられることになる。

なお、「無の字の留りはきくいしうの五字にかよふ也」とした後、「て」を付けて言うかどうかの点の説明があり、この点は後の項目でも繰り返されるが、ここでは省略する。続いて「ひふの二字はかりに通ふ」とする「相撲」の「すまひ・すまふ」と「病」の「やまひやまふ」を示した後、「悔ゆ」と「生ふ」について述べる。「悔」に「くひ・くふる」、「生」に「おひ・おふる」と示し、「ひふの二字斗かよへ共てをそへてひて共とまる也」とあつて、「て」を付けて言えるかに関するものとして挙げられているが、どちらもハ行の仮名で書くものであると考えていたことも分かる。これらヤ行上二段動詞とハ行上二段動詞の語尾イについて、作品の例を少し見ると、ヤ行上二段は、『東海道名所記』に「老たる」(一3ウ)と「むくひ奉らん」(五)が、「身の鏡」に名詞化したものであるが「無悔者」(上5ウ)が、「私可多咄」に同じく「むくひ」(一11オ)があり、ハ行上二段は、『東海道名所記』に「松茅おひしげりけり」(四10オ)と「蕪賣おひか、りたる」(四18オ)がある。『東海道名所記』の振り仮名一例(この本では巻一のみ振り仮名に動詞活用語尾の「い」表記があり、他は四段動詞の「くい」三例)以外は「ひ」であるが、例は少ない。ただ、『一歩』の記述のように、もとヤ行上二段の動詞も、「くふる」(悔)のようにハ行と意識されていたこと

が窺われる。

四

続く「▲奥のひの仮名を書事」はまた簡単なまとめである。「思」の下に「おもひ・おもふ・おもへ」を並べる等、九つの四段動詞を掲げて、連用形、終止・連体形、已然・命令形の仮名を示し、「如此ひふへの三字にかよふ類也是わひふへおの五音のかよひ也此類多し」とする。その後の「▲又奥のひの仮名の事」は、これまでの「▲」のところとは、示された用例の扱いが異なっている。▲の見出しの下に「此段は都而誹諧詞也」と記していわゆる口語であることを注した後に、次のような例を掲げる。

くれふ くれひで くれまひ
うたふ うたひで うつまひ
…
つなひで つながひで つながまひ
…
つひで つかひで つくまひ

ことく奥のひなるへけれどつなきつなくとかよふ故端のい也…つなひでつながふと一方にかの字入たるによりひふのかよひにあらす故に奥のひの仮名はあやまり也又くれひでといへはくれまひも右のこことく奥のひの仮名にて有へけれど是もくれふくれまひと一方にまの字入たるによりひふのかよひにあらすくれまじとしにかよふ故端のいの仮名也」と書かれている。すなわち、まず「つなひで」は誤りで「つないで」が正しい、また「くれまひ」は誤りで「くれまい」が正しいと述べている。これら力行・ガ行四段動詞イ音便と助動詞「マイは、「ひ」で書いて掲げたが「い」に訂正するということになる。ほかの「くれふ」等と「くれひで」「つながひで」等は、説明の最初に「くれふくれひでつながふつながひでとなどひふにかよふ類皆奥のひの仮名也」とあることから、この掲げた表記が正しいということになる。これについては、次の項目「▲又奥のひの仮名の事」の説明の中に、「よまふよまひでとひふにかよふゆへ奥のひの仮名也よままいと云時はいの仮名也まいの断前に委あり」とあることから「ふ」「ひで」を正しいとすることが確かめられる。このように助動詞ウと助詞イデは、「ひ」「ふ」に「かよふ」ということから、ウは「ふ」、イデは「ひで」としている。以上、この項目に掲げる例を、正しいと主張する仮名遣いに修正して示すなら、

くれふ くれひで くれまい
うたふ うたひで うつまひ
つないで つながひで つながまひ
ついで つかひで つかふ つくまい

ということになる。(これまでの「▲」が「…の仮名を書事」であつたのに対し、ここは「…の仮名の事」なので、こちらは正しくない表記で掲げてあつてもよいということなのかもしれないが、後の説明を読まないとき正しい仮名遣いが判明しないという分かりにくさがある。)イ音便と助動詞マイはいわゆる歴史的仮名遣いに合致する表記が、助動詞ウと助詞イデは歴史的仮名遣いとは異なる表記が主張されているということになる。

既に示したカ行・ガ行四段動詞イ音便以外の、助動詞ウ、助詞イデ、助動詞マイについては、調査した用例がまだ少ないので簡単に少し触れると、助動詞マイは、『東海道名所記』に「あるまい」が二例、『百物語』に「やけてなるまひ事」一例、『私可多咄』に「くるしかるまい」「なりますまい」など「い」一二例と「てはあるまひ」の「ひ」一例がある。「い」が多いと言えようか。近松浄瑠璃本では「まい」と「い」で書かれるとのことで、『一步』の主張と合っている。助動詞ウは、『東海道名所記』に「まいり申さう」など「う」四例と「であらふ」一例あり、『私可多咄』には「あらふ」「よからふ」「かへらふ」など「ふ」が多くあるが、「出さう」(二五オ)と「う」もある。「う」「ふ」両方あるが、近松浄瑠璃本では殆どが「ふ」であるとのことで、『一步』の記述に合う場合が多いか。助詞イデは、『私可多咄』に「はねいでは」(三三五ウ)の「い」一例があつた。『曾根崎心中』でも二例「いで」で、他の近松浄瑠璃本には「ひで」もあるということであるが、この助詞イデに関しては『一步』の主張と同じ表記が広く見られるというわけではないよう

である。

五

次の「▲又奥のひの仮名の事」(下に「此段の詞も皆諱言也」とある)には、次のような例が掲げられる。

よふで　よまふ　よまひで
のふで　のまふ　のまひで

…　　しのふで　　しのばひで

これに続いて「此上の段はふの仮名の所に書へけれと爰によく出合たるにより如此ひふへにもきくいしうにもかよはね共是はよむのむなど、かよふ故よむでのむでも云也むとふとは連声なるによりふの仮名也しのふではしのむとはいはれね共しのひしのふとかよふ故生つきのふの仮名なるによりて猶よし」などの説明が加えられる。このように、バ行・マ行四段動詞のウ音便は、いわゆる歴史的仮名遣いとは異なる「ふ」表記が主張されている。根拠は「むとふとは連声なるにより」と述べられる。

バ・マ行動詞ウ音便の例として、『身の鏡』に「た、酒さけのふて」(中2オ)がある。近松浄瑠璃本でも「ふ」で書かれるとのことで、『一步』の主張と作品の表記が合っている。

なお、『一步』には直接の記述が無いが、ハ行動詞のウ音便は作品中にも用例が多い。『東海道名所記』は、「いふて」(一言)九例、「遣手やりてにあふて」(一九ウ)、「壁かにそふて」(二一八ウ)、「うたふて」

(二8ウ)、「うしなふて」(二9オ)、「まふたる鶴」(舞) (二28ウ)、「髪をゆふたる事」(三10オ)、「よみ給ふける御歌」(五4オ)、「神とた、かふて」(五11ウ)、「酒にえふて」(五19ウ)、「口をすふて」(六19オ)、「つくるふて」(六29ウ)などで、二四例すべてが「ふ」表記となっている。「身の鏡」では、「あふたるもの」(上5オ)、「つかふて」(中9ウ)、「味ふてみれば」(中15オ)、「おもふたる心」(下3ウ)、「有合たる」(下7オ)「あざわらふて居たり」(下15オ)など、一五例すべてが「ふ」表記。『百物語』と『私可多咄』は、簡単に示すにとどめるが、前者の「高くなりたまふた」「気もちがふたるか」「市にてすこしかふた」など、後者の「思ふていふた」「やとふてきて」「とふていはく」など、すべて「ふ」である。近松浄瑠璃本もすべて「ふ」のようで、当時は動詞連用形のウ音便は「ふ」で書くものであった。

助詞イデと助動詞マイについては、この項目の最後に「よまふよまひでとひふにかよふゆへ奥のひの仮名也よままいと云時は端のひの仮名也まいの断前に委あり」とあり、前の項目で述べた「〜ふ」「〜ひで」「〜まい」と書くことを繰り返し述べている。

次の「▲又奥のひの仮名を書事」は、「やよひ 弥生」「こよひ 今宵」など「かよひかなにあらざる」ものについて述べる項目で、「常に仮名遣をよく見覚て書へし」と定家仮名遣いに委ねる。

六

続く「▲奥のひの下知の事」では、動詞の命令形の「〜い」の形

と、未然形に助動詞「い」の付いた形について述べる。

こひ^{*} ふうひ のかひ はなさひ

このように「ひ」で書くことを主張し、根拠は「こふこひこひでふうふうらひふうらひでのかふのかひのかひではなさふはなさひはなさひでとかよふ故奥のひの仮名也」とする。このように、助動詞ウ、命令形語尾のイまたは未然形に付く助動詞イ、助詞イデをすべて八行の仮名で書くとし、「は」「ひ」に「かよふ」と考えている。

命令形語尾イについては、『東海道名所記』に「いだしめされい」(三14ウ)と「とまらせられい」(四1ウ)、『身の鏡』に「悦ひませい」(二2ウ)と「あそこの日本紀をとてこい」(二9オ)があり、これらの本では「い」で書かれている。『一步』以前に「ひ」表記が広く行われていたということではなさそうである。近松浄瑠璃本でも「い」が多い⁽¹⁸⁾ようであり、『一步』の考え方が広まるということにもならなかった。

「下知の仮名」とする「ゑ け せて ね へ め えれ へ」について述べた後、「▲ひの仮名をみの声によむ事 付ふの仮名をむの声によむ事」の項目があり、ミ・ムを「ひ」・「ふ」と書く、当時行われた周知の仮名遣いについて述べる。次に、

▲ふの仮名を書事

ひふへの三字にかよふ詞の類也

又此三字の内

ひふの二字

ふへの二字にかよふ詞等也

というまとめがあるが、例によって「此詞の類奥のひ端のへの仮名の所にあり」と既に述べたことを記して終わっている。続いて、「らふ」を掲げて、「はらんをいひ替たる也はぬる詞を云替て引時はふの仮名也むとふとは連声也」とも連声なれ共是は遠しむとふとは近し」と述べ、助動詞ラウは「らふ」と書くことを主張する。この後は、「かよはぬ仮名」の例である、「きのふ」「けふ」「ゆふへ」等、「をの声によむ也」とする「あふひ」「あふく」、「むの声にいふ」とする「さふらひ」が掲げられる。

七

次に、「一」として「無の字を引時なふとふの仮名に書あやまりたる物おほし」という注意がある。この誤りの理由を「前にもことはりしごとく仮名遣に無の字を書てなひと奥のひの仮名をつけたるを見て奥のひのかよひなる故ふの仮名を書たると見えたり」と、定家仮名遣いの「さがなひ 無悪」のせいであろうと推測している。

この形容詞連用形ウ音便の仮名遣いについては、続けて「近ふ 高ふ 青ふ 白ふ 黒ふ 赤ふ」を掲げ、「ふの仮名に書あやまりたるもあり此類多しいつれもふの仮名也」と記して、「う」が正しいことを主張する。

形容詞ウ音便は、第五節で見た動詞のウ音便が「ふ」で書かれるのとは対照的に、「う」で書かれるという書き分けが当時行われていたことを以前に報告した。ここでも少し示すと、『東海道名所記』

では、「清」(一五オ)、^{きよみづにて}「堆して」(一十オ)、^{うづたか}「こと葉いやしう」(一八ウ)、「うつくしうおはします」(二一ウ)、「つようおはします」(二二オ)、「海潤」(二七オ)、「あらくしう」(三十四オ)、「大いびきことくしうかきて」(三五オ)、「山のかたちはうつくしうして」(五十四ウ)、「かねくろうつけたり」(六二オ)、「髪うつくしうゆひける」(六二オ)と、すべて「う」であり、「身の鏡」でも、「仕合あしうして」(中二ウ)、「行跡はあしうして」(下二ウ)、「身まづしうして」(下十六ウ)と、やはり動詞ウ音便の「ふ」と対照的に、「う」で書かれる。『私可多咄』でも、「うれしうない」(一四ウ)、「かしこうもなき」(一六オ)、「きすがなうても」(二一〇ウ)、「あつうてならぬ」(三七ウ)、「かしこうなき」(四一〇オ)と「う」で、やはり動詞ウ音便の「ふ」とは区別されている。

形容詞ウ音便については、この後の「▲端のいの仮名を書事」の項目も関わる。

きくいしう

此五字に通ふ詞の類也

とあって、「遠」「近」「無」の下に、「とをき・とをく・とをい・とをし・とをう」「ちかき・ちかく・ちかい・ちかし・ちかう」「なき・なき・ない・なし・なう」をそれぞれ並べる。ここで「とをう」「ちかう」「なう」が掲げられているように、形容詞連用形のウ音便は「う」で書くことが改めて主張されている。

当時の多くの本で、同じウ音便が、動詞は「ふ」、形容詞は「う」と書き分けられる背景には、この「一歩」が繰り返し主張する、形

容詞は「きくいしう」に「かよふ」ということが、広く意識されていたことが考えられよう。

なお、右の「端のい」の前に、「へつろふ」は「へつらふ」が正しいこと、定家仮名遣いの「と、のほる 調」は「ふ」が正しいこと、同じく定家仮名遣い「おいて 負 すいて 吸」は「ひ」が正しいことの、三点の訂正が「一」として記されている。

「▲端のいの仮名を書事」のところには、続いて次の記述がある。

きくいしうの内きくいの三字にかよふ詞

田をすいて

た、いて

花をこいで

船をこいで

刀をこいで

きくいしうの内いししの二字にかよふ詞

花をさいて

船をさいて

このように、カ・ガ行四段動詞イ音便とサ行四段動詞イ音便について、「い」が正しいとしている。既に「一同仮名遣い奥のひの所に」とする部分にか行イ音便の注意が、「▲又奥のひの仮名の事」の項目にカ行・ガ行イ音便の注意が記されてあったこと、先に見た通りである。「い」が正しいから、この「▲端のいの仮名を書事」で説明するのがふさわしいはずであるが、他の幾つかの規則と同様に、既に前の項目等で触れてしまっているという、「一步」の特徴が、このカ・ガ行イ音便にも当てはまる。

この後、「まいる」「はいる」が「い」であることを述べ、次の「▲むの仮名の事」では「むめ 梅」「むま 馬」などが「む」であると主張する。続く「▲うの仮名の事」では、再び「きくいしう」を掲げ「詞を引時此五字にかよふはうの仮名也」とする。これも、本来はこの「う」の項目で説明すべき動詞ウ音便や形容詞ウ音便について、既に前の項目で触れてしまっているため、極めて簡単な記述になっている。更にこの「五字にかよふ」ということも「端のいの仮名の所にてするへし」と述べるように、「い」の項目で既に記したことである。ただ、「右五字にかよはぬは皆ふの仮名と心得へき也」という主張は、「きくいしう」でないウは「ふ」でよいという利用価値の高い規則であろう。「但生れ付のうの仮名も有へし」と続けるように簡単には割り切れないようであるが。続く「声によむ字は大略うの仮名也」という字音の仮名遣いは、以前調査した仮名草子版本で基本的に「くう」であったという実態と合致するが、続けて「ふの仮名を書字も少々あり」と述べるので、「かよはぬ仮名」の方は単純化されていない。

続いて「まふで」「まうで」（詔）と「たうとし」「たふとし」（貴）について述べ「右二つはきくいしうの五字の内にもはひふへの四字の内にもかよはざる故断如此」する。次に「▲中のみの仮名の事」となる。「ある 居 くらゐ 位 むのし、猪」と「どの 宿直」を「ゐ」であるとした後、

もちゐる 用

是はもちゐもちゆるといへはやゐゆえよの五音の通ひ也又奥

のひの仮名の所に用の

字にもちひてとひの仮名ありさるによりてもちふるともいふ
也中のゐにても奥のひ

にても書敷

と記して、ワ行上一段動詞「用ゐる」の仮名遣いに「もちひ」と
「もちひ」の両方を認めている。「ゐ」の根拠は「やみゆえよの五音
の通ひ」となっている。ヤ行の仮名をこのように考えている。

次の「▲」はの仮名をわの声につかふ事では、「思」「通」を掲げ、
それぞれの下に「おもひ・おもふ・おもへ・おもはん」「かよひ・
かよふ・かよへ・かよはん」を並べ、「ひふへの三字に通ふ詞はは
の字を加てはひふへの四字にかよふ也」と説明する。これまでの仮
名遣書では、「は」の項目に活用語尾を入れることが殆ど無いので、
ここは、「かよふ」ことを中心とするこの「一步」の特徴がよく表
れた箇所である。この四段動詞に続いて、「備」「加」の「そなへ・
そなふ・そなはる」「くはへ・くはふ・くははる」と「居」「障」の
「すへ・すはる」「さへ・さはる」を掲げる。続く「理」ことはる
「顕 あらはす」では「是等のはにはかよひ字無之」と述べ、活用
語尾でない部分をはつきりと区別している。以下の「川 かは 哀
あはれ」と「▲」の仮名を書事「は」通ひ仮名」でないので省略
する。続く「一上にか、ぬ仮名の事」以下の幾つかの注意は、「仮
名遣といふにはあらず」と記す通りであり、これも今回は省略する。

八

以上のように「一步」下巻を最初から見てきたが、示された「通
ひ仮名」の仮名遣い規則を、現代の用語も使いながら適宜分かりや
すく言い換えて示すと、次のようになるう（「かよふ」はそのまま
「通う」とする）。

動詞語尾エで「ゆ・え」と通うものは「え」

動詞語尾エで「ゆる」というものも「ふ」に通うものは「へ」

動詞語尾エで「ゆ・え」と通い「ふる」といわないものは「え」

「植」は「うへ」「うふる」と「よむ」ので語尾エは「へ」

「据う」は「すはる」と「は」に通うので語尾エは「へ」

動詞語尾エで「は・ひ・ふ・へ」に通うものは「ゆる」といつても

「へ」

動詞語尾エで「は・ひ・ふ・へ」「は・ふ・へ」「は・へ」「ふ・へ」

に通うものは「へ」

形容詞語尾イは「き・く・い・し・う」に通うので「い」

カ行四段動詞連用形イ音便は「き・く・い」に通うので「い」

動詞語尾イで「ひ・ふ・へ」に通うものは「ひ」

助詞イデは「くれふ」「くれひで」と「ひ・ふ」に通うので「ひ」

助動詞ウは「くれふ」「くれひで」と「ひ・ふ」に通うので「ふ」

助動詞マイは「くれまじ」と「し」に通うので「し」

（または「まじい」の「じ」の略であれば「き・く・い・し・う」

の「い」とする)

マ行四段動詞連用形ウ音便は「む」と「ふ」の連声により「ふ」
バ行四段動詞連用形ウ音便は「ひ・ふ」と通うので「ふ」
命令形語尾イは「こふ」「いひ」「こひで」「来」の場合」と通うの
で「ひ」

動詞未然形+助動詞イは「のかふ」「のかひ」「のかひで」「(退く)
の場合」と通うので「ひ」

動詞語尾ウで「ひ・ふ・へ」「ひ・ふ」「ふ・へ」に通うものは「ふ」
助動詞ラウは「む」と「ふ」の連声により「ふ」

形容詞連用形ウ音便は「き・く・い・し・う」に通うので「う」
ガ行四段動詞連用形イ音便は「き・く・い・し・う」の内「き・
く・い」に通うので「し」

サ行四段動詞連用形イ音便は「き・く・い・し・う」の内「い・
し」に通うので「い」

「用ゐる」は「ゐ・ゆ」と通うので「ゐ」または「ひ・ふ」と通う
ので「ひ」

動詞語尾ワで「は・ひ・ふ・へ」「は・ふ・へ」「は・へ」に通うも
のは「は」

(これらのうち、動詞語尾エの、「は・ふ・へ」は「替」の「かは
る・かふる・かへる」、「は・へ」は「障」の「さはる・さへる」、
動詞語尾ワの、「は・ふ・へ」は「備」の「そなへ・そなふ・そな
はる」と「加」の「くはへ・くはふ・くははる」、「は・へ」は「居」

の「すへ・すはる」と「障」の「さへ・さはる」が、例として挙げ
られており、ワ行下二段「据う」の場合とともに、現代の知識から
すると別語とすべきものを「かよふ」としているものである。)

九

ところで、「通ひ仮名」の仮名遣いが問題となる部分を、「一步」
に記述がないが同類のものも含め考えうる場合を挙げてみると、

A ア行下二段動詞活用語尾(「心得」)のウ・エ

B ハ行四段動詞活用語尾のワ・イ・ウ・エ

C ハ行上二段動詞活用語尾のイ・ウ

D ハ行下二段動詞活用語尾のウ・エ

E ヤ行上二段動詞活用語尾のイ

F ヤ行下二段動詞活用語尾のエ

G ワ行上二段動詞活用語尾(「用ゐる」)のイ

H ワ行下二段動詞活用語尾のウ・エ

I カ・ガ行四段動詞連用形イ音便

J サ行四段動詞連用形イ音便

K ハ行四段動詞連用形ウ音便

L バ・マ行四段動詞連用形ウ音便

M 形容詞連用形ウ音便

N 形容詞終止・連体形語尾イ

O 二段・カ変・サ変動詞および下二段型助動詞の命令形語尾イ

P 動詞未然形+助動詞イ・サイ

Q 助動詞ウ

R 助動詞マイ

S 助動詞タイ

T 助動詞ラウ

U 助動詞ベイ

V 助動詞イデ

となる（これら以外に助動詞サウナ・ヤウナなども考えられるが、

『二歩』に同類のものの記述がないので省略する。）。

これらについて、『仮名文字遣』慶長版本と、この『二歩』でどのように記述されているかまとめてみる。

A 〈ア行下二段〉

『仮名文字遣』

「え」に「こゝろえて 心得 意獲」

『一歩』

(ナシ)

B 〈ハ行四段〉

『仮名文字遣』

「ひ」に「ならひて 習 效」「とひて 問」

「うしなひて 失 喪」等

「ふ」に「ぬふ 縫」「きらふ 嫌」「やとふ 雇」等

「へ」に「おもへは 思念憶惟以想」「にほへる 匂」

「とへ とふ共 問 訊」等

「い」に「おいて 負」「ましない 給ふ」

『二歩』

「すいて 吸吮 口也」等

▲端への仮名の書事

「給」の下に「たまはる・たまひ・たまふ・たまへる」

▲奥のひの仮名を書事

「思」「匂」「問」等の下に「おもひ・おもふ・おもへ」「にほひ・にほふ・にほへ」「とひ・とふ・とへ」等

▲ふの仮名を書事

「ひ^{イッヘ}ふへの三字にかよふ詞の類也」

(例は挙げられていない)

▲はの仮名をわの声につかふ事

「思」「通」の下に「おもひ・おもふ・おもへ・おもはん」

「かよひ・かよふ・かよへ・かよはん」

「一同仮名遣いの仮名の所に」とするところに

「おいて 負 すいて 吸 いづれもあやまり也…奥のひの仮名也」

C 〈ハ行上二段〉

『仮名文字遣』

「ひ」に「おひて 生テ」

「ふ」に「おふるひつち いねかりたる跡におふる也」

「おふる 生」

『二歩』

「一同仮名遣奥のひの所に」とするところに

「生」の下に「おひ・おふる」

▲ふの仮名を書事

ひふへの三字にかよふ詞の類也

又此三字の内

ひふの二字

ふへの二字にかよふ詞等也

(とあるうちの「ひふの二字」が相当すると見られる。この後に「此詞の類奥のひ端のへの仮名の所にあり」とあって、「▲奥のひ」には「又ひふへの内ひふの二字にかよふ詞あり但ひふのみかよひて連歌の詞に成はあまたあるへからす少々前に出たり」と記すが、この「少々前に出たり」とするのが右の「おひ・おふる」等と見られる。)

D へ八行下二段

『仮名文字遣』

「へ」に「ちかへて 違」「そなへて 備」

「をさへて 押 抑」「たへたり 堪任 耐」

「こたへて 答 対 応」「つたへて 伝 施」

「た、へて 湛 水也」等

「え」に「したかえて 随」

「ゑ」に「こしらゑて 誘」

「ふ」に「ひかふ 扣 馬をひかふるなり」「た、ふ 湛」

「たつさふ 携 馴」「たとふ 喩 譬」

「とらふ 捕」「わきまふ 辨」「うれふる 愁 患」

「かすふ 数 算」「そなふ 備 具 饌」

「かそふれば 数 算」等

『二歩』

▲中のえの仮名を書事

「とらふ…とらふといふ故とらへの時はよこへ也」

「かんかへ をしへ なからへ (すへ) をさへ そなへ…

とふにかよふ故よこへ也」。

▲端のへの仮名を書事

「ふへの二字にかよふ詞」(とするのが相当すると見られる。)

(用例は本来はヤ行の「榮」の「さかふる・さかへる」が

挙げられている)

▲ふの仮名を書事

「ふへの二字にかよふ詞」

▲はの仮名をわの声につかふ事

「備」「加」の下に「そなへ・そなふ・そなはる」「くはへ・

くはふ・くははる」

「障」の下に「さへ・さはる」

E へヤ行上二段

『仮名文字遣』

「ひ」に「くひて 悔」「おひぬれば おいぬれはとも」

「おひぬれば おいぬ共 老」

「い」に「おい 老」

『二歩』

「一同仮名遣奥のひの所に」とする部分に

「悔」の下に「くひ・くふる」

F へヤ行下二段

『仮名文字遣』

「え」に「たえて 絶」「ほえ 吠」「なえたる 弱」

「こえたる こそたたりとも 肥満」「きえて 消」

「くさのもえて 草萌」「こえて 越 超 踰」

「きこえて 聞 聴」「そひえ 聳」等

「ゑ」に「こそたり 肥」

「へ」に「いへくすり いえくすり共 愈薬」

「さかへ さかえ共 栄 富」

『一步』

▲中のえの仮名を書事

「消」「越」「見」等に「きえ・きゆる」「こえ・こゆる」

「みえ・みえる」等

「かやうにゆえと通ふ類也」

G へワ行上二段

『仮名文字遣』

「ひ」に「もちひて 用 庸」

『一步』

▲中のゐの仮名の事

「もちゐる 用」と掲げ「中のゐにても奥のひにても書敷」

H へワ行下二段

『仮名文字遣』

「へ」に「うへをく 栽植 木草ヲ置也」

「うへたり 飢」「いひうへ 饑」

「すへて 居 扣」「むまをすへて 馬居」

「ゑ」に「すゑて 馬ヲスエ留也」

「ふ」に「うふる 栽 殖 種」

『一步』

▲中のえの仮名を書事

「植」：ち、みにあらず是仮名遣にうへうふると両所にあり

「す^原…すはるとはにかよふ故是もよこへ也」

I へカ・ガ行イ音便

『仮名文字遣』

「い」に「をしひらいて 排」「くつをはいて 着沓」

「たちをはいて 帶劔 帶刀」

「しのいて 凌」「すいて 透 簾也」

「すいて 犁 田也」「すいて 漉 紙也」等

「ひ」に「とひて 解説 脱 釈」「なひて 泣」

『一步』

「一同仮名遣奥のひの所に」とするところを

なひて 泣 とひて 説

いづれもあやまり也：端のいの仮名也

▲奥のひの仮名の事

「つなきつなくとかよふ故端のい也」

▲端のいの仮名を書事

きくいしうの内きくいの三字にかよふ詞

田をすいて 紙をすいて 鏝でついて

たゝいて ないて なぞをといて

花さいて 火をたいて 植木をついで

船をこいで 船つないで ころいで

刀をといで 粉をへいで 穴をふさいで

J へサ行イ音便

『仮名文字遣』

(ナシ)

『一步』

▲端のいの仮名を書事

きくいしうの内いしの二字にかよふ詞

花をさいて 船をさいて

K へハ行ウ音便

『仮名文字遣』

(ナシ)

『一步』

(ナシ)

L へバ・マ行ウ音便

『仮名文字遣』

(ナシ)

『一步』

▲又奥のひの仮名の事

よふで よまふ よまひで

のふで のまふ のまひで

…

しのふで しのばふ しのばひで

「むとふとは連声なるによりふの仮名也」

M へ形容詞ウ音便

『仮名文字遣』

「う」に「わかうして 稚 幼 少 若 弱」

「ほそうして 細 織」

「あちきなう 無為 無常」など

『一步』

「一無の字を引時…」とするとともに、

「近ふ 高ふ 青ふ…など、ふの仮名に書あやまりたるも

あり此類いづれもこの仮名也」

▲端のいの仮名を書事

「遠」等の下に「とをき・とをく・とをい・とをし・とを

う」等

▲うの仮名の事

きくいしう

五字にかよふ詞の類端のいの仮名の所にてしるへし

N へ形容詞語尾イ

『仮名文字遣』

「い」に「ゆ、しい」

「ねたいかな ねたひかな共 不分 嫉妬」

「ひ」に「さかなひ 無悪」「いさきよひ 潔」

『一步』

▲端のいの仮名を書事

右のMに同じ

▲うの仮名の事

右のMに同じ

O (命令形語尾イ)

『仮名文字遣』

(ナシ)

『一步』

▲奥のひの下知の事

「こひ」が挙げられ「奥のひの仮名也」

P (動詞未然形十イ・サイ)

『仮名文字遣』

(ナシ)

『一步』

▲奥のひの下知の事

「ふらひ のかひ はなさひ」が挙げられ「奥のひの仮名也」

Q (助動詞ウ)

『仮名文字遣』

(ナシ)

『一步』

▲又奥のひの仮名の事

くれふ くれひで くれまひ

ふらふ ふらひで ふるまひ

などを並べる

R (助動詞マイ)

『仮名文字遣』

(ナシ)

『一步』

▲又奥のひの仮名の事

くれふ くれひで くれまひ

ふらふ ふらひで ふるまひ

などを掲げ、「端のいの仮名也」とする。

S (助動詞ラウ)

『仮名文字遣』

(ナシ)

『一步』

▲ふの仮名を書事

「らふ」を掲げ「：はらんをいひ替たる也はぬる詞を云替て引時はふの仮名也」

T (助動詞タイ)

(ナシ)

U 〈助動詞ベイ〉

(ナシ)

V 〈助詞イデ〉

『仮名文字遣』

(ナシ)

『一步』

▲又奥のひの仮名の事

くれふ くれひで くれまひ

ふらふ ふらひで ふるまひ

：

つなひで つながひで つながふ つなぐまひ

▲又奥のひの仮名の事

よふで よまふ よまひで

これを見ると、『仮名文字遣』慶長版本では、同じ活用の種類である動詞の活用語尾が、異なる仮名遣いとなっている場合の少なくないこと、それに対して『一步』にはそのようなゆれのないことが、特徴の一つとして見出せる。『仮名文字遣』版本のゆれは、

Bの「ならひて 習」「とひて 問」等

「おいて 負」「すいて 吸」

Dの「そなへて 備」等

「したかえて 随」

「こしらゑて 誘」

Eの「おひぬれば おいぬ共 老」

「おい 老」

Fの「きえて 消」等

「こゑたり 肥」

「いへくすり いえくすり共」「さかへ さかえ共」

Hの「すへて 居」「むまをすへて」

「すゑて 馬ヲ」

Iの「すいて 漉」等

「とひて 解 説：」「なひて 泣」等

Nの「ゆゝしい」等

「さかなひ 無悪」「いさきよひ 潔」等

などに見られる。このうち、「おいて 負」「すいて 吸」、「したかえて 随」、「なひて 泣」「とひて 説」、「さかなひ 無悪」は、『一步』が誤りであると指摘していること、既に見た通りである。

当時の定家仮名遣いの不統一をよく見出していると言えるが、『仮名文字遣』慶長版本に三例見られる語尾を「ゑ」とする「誤り」については全く指摘していない(但し、「世間流布の仮名遣」に「ゑ」が無かった可能性はある)。これは、当時は活用語尾に「ゑ」を用いることが基本的にはなかったということが関係していると考えられる。作品中にも語尾「ゑ」は殆ど見られない。『一步』では「ゑ」の項目さえない。通わない仮名である「ゑ」は対象外だったと見られよう。

『仮名文字遣』慶長版本を見る限りでは、定家仮名遣いは基本的に一語一語仮名遣いが定められるものであり、同じ活用の種類に属す語は同じ仮名遣いになるといような考え方は希薄だったように一見みえる。現代の見方からすると、この点を追究し前面に出した『二歩』の方が合理的である。活用語尾を「ゑ」とする誤りには言及していないという見落とし（そうかどうかは確定できないが）はあるものの、世間流布の仮名遣書の矛盾点を見出し、それを誤りとすることから発して正しい規則の提示へと向かうという、『二歩』に何度も見られる説明方法は、理解しやすいものであったと考えられる。

ただ、構成は従来の仮名遣書を踏襲し、「中のえ」「端のへ」「奥のひ」という分類で項目を立てているので、既に何回も指摘し、前節にもまとめたものを見ても分かるように、同じ規則が複数の項目で繰り返し述べられ、また本来説明すべき箇所における記述が「前に出たり」「前の段に断侍」等で終わるということになってしまっている。「通ひ仮名」の規則を中心にするという新しい仮名遣書であるが、それにふさわしい項目にできなかった点は惜しまれる。しかし当時は皆同様の項目になっているから、仮名遣書はこういうものでなければならなかったであろう。また、繰り返し同じものを見ることによって、記憶されやすいという効果はあったであろう。

ハ行動詞の語尾はハ行の仮名で書く、ヤ行下二段動詞の語尾エは

「え」、ワ行下二段動詞の語尾エは「へ」、ヤ行上二段動詞の語尾イは「ひ」、動詞のウ音便は「ふ」、形容詞のウ音便は「う」、形容詞の語尾イは「い」など、動詞・形容詞の活用語尾については、『一歩』の主張が、一部歴史的仮名遣いとは異なるところも含め当時の表記の傾向に合致する。当時の表記がこのような考え方から行われていたのかということを教えてください。『一歩』は、仮名遣い意識の歴史を考察する上で貴重な資料であると言える。ただし、命令形語尾イ、助動詞イ、（助動詞ウ）、助詞イテなどについては、現代の知識からすると無理な結びつけをして、これらもハ行に通うとしているが、その表記が広く行われていたわけでもないようである。このように、当時の考え方が反映しているわけではないと思われる部分もある点に注意する必要がある。

また、「通ひ仮名」については詳細な説明が多いが、「かよはぬ仮名」については、流布の「仮名遣」を見て覚えよということになっている。「是に記すは通ひ仮名のみ也」とする書としては当然であるが、実際には「かよはぬ仮名」の部分で問題になるものが多い。『二歩』等が「通ひ仮名」の書き方に理屈を考えたように、やがては「かよはぬ仮名」の部分にも理屈を考える仮名遣書も見られるようになるが、これについてはまた改め見ることにしたい。

注1 『二歩』の解説・研究については中田祝夫（一九八五）の解説などに紹介されているのでここでは省略する。これ以後のものとして、佐藤宣男（一九七二）、飯田晴巳（一九九六）などがある。仮名遣いについては、

坂梨隆三(一九八〇)等に「一步」の記述が引かれ考察が行われている。なお、「一步」本文は勉誠社文庫126による。

2 久保田篤(一九八六)(一九九六)等。

3 山内育男(一九七二)

4 武市真弘(一九八九)の解説(八七頁)。「後普光園院御抄」はこの文獻に、「仮名遣近道」は国語学大系第六巻仮名遣一による。

5 『仮名文字遣の本』文明十一年本と慶長版本は駒沢大学国語研究資料第二に、「仮名文字遣」は陽明叢書14『中世国語資料』に、天正六年本は古辞書研究資料叢刊第一巻による。

6 近世文学資料類従古板地誌編7による。

7 久保田篤(一九九六)(二〇〇〇)

8 近世文学資料類従仮名草子編25による。

9 この『身の鏡』は仮名遣いが統一されていないところがあり、これを規範のゆるみと見ることができるともされないが、全てそうとも言えないところもある。例えば「費ゆ」の連用形の名詞化「ついえ」が下巻に集中して見られ、「ついへ」「五例」「ついで」二例となっている。漢字表記であるが「こころう」も同じ上17才で「心得」と「意得」が見られることなどを考え合わせると、あえて表記を変えることも行われていると言える。

10 中田祝夫(一九八五)二四六頁。

11 『百物語』『私可多咄』は近世文学資料類従仮名草子編24による。

12 坂梨隆三(一九八六b)

13 坂梨隆三(一九八〇)

14 坂梨隆三(一九八六a)

15 坂梨隆三(一九八〇)

16 坂梨隆三(一九八六a)

17 坂梨隆三(一九八六a)。ただし「負ふ」は例外で「負ほて」とのことである。

18 坂梨隆三(一九八〇)に、近松の作品では「い」で書かれるが、『曾根崎心中』に一例、諸本みな「ひ」とするものがあると述べられている。

19 「一步」に記述のないAについては、当時の作品、例えば『身の鏡』に、「まこと、こころへ」(上17才、「こ、ろへべし」(下7才)、「心得」(上17才)、「意得べき事」(中10ウ)などがあって6例すべてが「へ」である(名詞化したものは、「意得」一例のほかに、「意得あるべきか」(上6ウ)があり、振り仮名の「え」一例はある)。Tについては、「私可多咄」に、「なのりたい」(7ウ)、「もとめたい」(11ウ)、「見せたい」(16ウ)、「なりたい」(37才)など、「い」が多くある。Uについては、『東海道名所記』に、「お草臥であるべいに」(314ウ)、「夜をぶちあかし給ふべいな」(315ウ)、「ほうはるべいに」(同)、「ひつかくべいよ」(同)などがあり、「い」で書かれている。

20 久保田篤(一九八六)(一九九六)で見た作品には全く無かったが、二節に示したように『身の鏡』にはヤ行下二段動詞語尾エには二例「ゑ」が見られた。坂梨隆三(一九八六b)にも近松浄瑠璃本の語尾「ゑ」が少数ではあるが示されている。このように、全く見られないわけではないが、極めて少ない。

参考文献

- 飯田晴巳(一九九六)「一步」覚書——「仮名遣」を通して見た活用の自觉・形容詞の場合(『富士フェニックス論叢』四)
- 久保田篤(一九八六)「近世初期板本の仮名づかい」(『国語と国文学』六三卷二号)
- 久保田篤(一九九六)「浅井了意自筆版下本の仮名づかい——『東海道名所記』「江戸名所記」「因果物語」を資料として——」(『山口明穂教授還暦記念国語学論集』明治書院)
- 久保田篤(二〇〇〇)「『東海道名所記』に見る近世初期仮名遣いの特徴」(『成蹊国文』三四)
- 坂梨隆三(一九八〇)「曾根崎心中の「い・ひ・ゐ」について」(『近代語研究』第六集)武蔵野書院)
- 坂梨隆三(一九八六a)「曾根崎心中の「う・ふ・む」」(『築島裕博士還暦記念国語学論集』明治書院)

坂梨隆三（一九八六b）「曾根崎心中の「え・へ・ゑ」」（松村明教授古稀
記念国語研究論集）明治書院
佐藤宣男（一九七二）「二歩」における「てにをは」研究」（『藤女子大
学・短期大学紀要』九）
武市真弘（一九八九）『静嘉堂文庫蔵後普光園院御抄・仮名遣つ、らおり』
（和泉書院）
中田祝夫（一九八五）『二歩』（勉誠社文庫126）
山内育男（一九七二）「かなづかいの歴史」（中田祝夫編『講座国語史2音
韻史・文字史』大修館書店）

（くぼた・あつし 本学教授）